

第6回日越国際学生交流セミナーをおえて



海外交流

多田博一*

Report on 6th Japan-Vietnam International Student Seminar

Key Words : Hanoi, Student Exchange

2011年10月4日から8日までの4泊6日の日程で、日越学生交流セミナーのためにハノイを訪れた。このセミナーは、2004年11月に第1回目を阪大で開催してから、ハノイと大阪でほぼ毎年交互に開催され、今回が第6回目となる。ベトナム科学技術アカデミー(VAST)物質科学研究所(IMS)がホストとなり、ベトナム国家大学ハノイ校工科大学(UET)大阪大学基礎工学研究科、大阪大学ナノサイエンスデザイン教育センター(ISDN)の共催により開催した。阪大からは、岡村康行・基礎工学研究科長、戸部義人・前研究科長、佐藤宏介・副研究科長、伊藤正・ISDN副センター長をはじめ教員7名と、学生15名(学部3年生2名、4年生2名、院生11名)が参加した。ベトナム側からは、Nguyen Van Hieu・元VAST総裁、Nguyen Ngoc Binh・UET学長、Nguyen Quang Liem・IMS所長他の教員と、16名の学生が参加した。

このセミナーでは、毎回特定のテーマについて、日本人学生とベトナム学生が討論を行い、ひとつの結論を導くことを課題としている。今年度のテーマは、“Engineering Science for Green Innovation”とし、4グループに分かれ、時には真剣に、時にはお酒も交えて議論を行った。英語での討論に加え、さまざまな意見をひとつの方向にまとめていくプロセスを学ぶことは、双方の学生にとって重要な経験に

なっている。

本セミナーのもうひとつの側面は、大阪大学ならびに基礎工学研究科の良さを知ってもらい、基礎工学研究科にて勉学・研究を行いたいと希望する意欲のある学生を募るとともに、本人の適正と興味を把握し、研究室・研究スタッフの紹介を含む適切な進路指導をサポートすることにある。

この取り組みの歴史は古いが、とりわけ2005年に基礎工学研究科とVAST-IMS、UETとの間で合意したプログラム「ジョイント修士コースならびにサンドイッチ博士コース」が基本となっている。ジョイント修士課程は、1年目をハノイにて教育を受け、2年目は基礎工学研究科の英語コースに転入学するプログラムであり、修士号は基礎工学研究科が授与する。入学金、授業料、渡航費ならびに月々の奨学金(月額10万円程度)はベトナム政府教育訓練省(MOET)より支給される。学生の募集は、MOETの海外留学生採用基準に従ってスクリーニングを行い修士1年生として入学を許可する。毎年の入学者は5~10名程度であり、平成23年度4月の入学者は7名であった。1年次の授業に関しては、基礎工学研究科での提供科目を参考に編成され、ベトナム側の教員によって行われる。転入学の基準は、TOEFL(IPT)500点以上を取得することと、面接による評価である。進学を希望する研究室の教員による電子メールでのやりとりによる評価に加え、今回の訪越では、6名の教員によって面接を行い、7名中4名を合格とした。この後、12月に正式な転入学願書が提出され、教授会の承認を経て平成24年4月より修士2年としての活動が始まる。転入学が叶わなかった学生は、ハノイにて引き続き修士課程をすごし、UETあるいはIMSにて修士号を取得する。

サンドイッチ博士コースは、ジョイント修士コー



*Hirokazu TADA

1962年5月生
東京大学大学院理学系研究科化学専攻
博士課程中退(1989年)
現在、大阪大学 基礎工学研究科 教授
博士(理学) 分子エレクトロニクス
TEL : 06-6850-6430
FAX : 06-6850-6433
E-mail : tada@molelectronics.jp

スの修了生に加え、ベトナム国内の大学修士課程を修了した者を対象とし、MOETでの審査(Grade Point Average 3.5以上など)、基礎工学研究科での審査を経て進学・入学を許可するものである。MOETからの奨学金(30ヶ月)の受給にあたり、ベトナムでの6ヶ月以上の研究が義務づけられている。

これらのプログラムの創設の背景には、物質科学ならびにナノサイエンス・テクノロジーを牽引する人材、特に教員の養成に注力するベトナム政府の意向がある。ベトナムの大学では、まだ学位を持たない教員もたくさん居るため、ベトナム政府は積極的にフランス、オランダ、アメリカ、オーストラリア、韓国などの海外の大学院に留学させ、基礎教育力・研究力の底上げを行っている。そのためのプロジェクトを数多く推進し、さらには、現在、ベトナムでは外国資本による新大学の設立が計画されている。すでにハノイにはフランス資本の大学(University for Science and Technology of Hanoi, USTH)が活動を開始し、ホーチミンにはドイツの大学が設立されることが決まっている。ベトナム全土で4大学を計画しており、残る2大学は検討中・交渉中のものである。

今回の訪越では、USTHの副学長 Nguyen Van Hung 教授と面談の機会を得た。学長はフランス人である。キャンパスはハノイの西30 kmにあるホアラク(Hoalac)ハイテクパークに2015年の完成を予定しており、現在はIMSと同じVASTの敷地内の建物を利用している。バイオテクノロジー、海洋、物質科学、エネルギー、航空宇宙、情報の6学科で構成し、2020年までには8000人の学生を受け入れる計画である。修士課程修了後は、フランスの大学または研究所にて研究を続けて博士号を取得し、帰国後は、USTHの教員あるいは企業研究者として活躍することが期待されている。学生は、数多くの大学あるいは研究機関のなかから、適切な研究場所を選ぶことが可能である。もともとフランスでは、大学と研究所がコンソーシアムを形成していることが効果的に働き、フランス政府の全面的な支援を得ている。

日本にも、新大学の設立への働きかけ、期待があり、2年前には日本の学長を招いて日越学長会議が開催されている。個々の大学で対応できる域を超え

ており、大学間の連携と結集が必要であるが、まとめることが難しい。

2年前は、ハノイの高等学校を訪問する機会を得た。流暢な英語に驚かされた。多くの生徒が、数学オリンピックや物理、化学オリンピックで金銀メダルの受賞者だという。こうした学生の多くは、卒業後アメリカの大学への進学を希望する。ひとつは、授業料などの負担が少ないこと、卒業後のキャリアパスが明確であること、そして何より言葉のハードルが低いことが理由である。

今回、ベトナムに帰国している基礎工学研究科の卒業生にも集まっていた。皆、大学の教員や企業の研究者として活躍されている。大阪での生活は本当に楽しかったと笑顔で答えていただいたが、やはり言葉の問題は苦勞したそうである。英語コースとはいえ、研究室のセミナーは日本語で行われることが多く、スライドも日本語だけだと、理解するのはほとんど不可能だという。一方で、英語でセミナーをすると日本人学生の多くが退屈な時間を過ごすことになる。この点は、今後の国際化を考える上で大きな課題である。

雨が多く天候には恵まれなかったが、おかげさまで無事にすべてのスケジュールを消化することができた。この場を借りて関係各位にお礼を述べたい。最初は緊張していた学生も、お酒の力も借りながら、最後は随分打ち解け別れを惜しんでいた。もともと、おもてなしの精神や気遣いの心は、日越とも非常に良く似ている。教育そして研究の国際化のパートナーとして最も相応しい国のひとつであると思う。



学生による討論風景



セミナー終了後集合写真

